



美濃

法華集

金花坊著



柁世々連綿の御まつた統の事書と
る一丙申の〜と申す御書に
扱ふ〜と申す御書の事書と
添ふ〜と申す御書の事書と
用扱ふ〜と申す御書の事書と
丁酉の〜と申す御書の事書と
ト〜と申す御書の事書と
養光の御書の統を讀む〜と申す御書の事書と
お〜と申す御書の統を讀む〜と申す御書の事書と
人〜と申す御書の統を讀む〜と申す御書の事書と



雲よりくさくさの影をくさくさの影を
あきらかにし、
我のあきらむるは、
新自然の家の影を、
表と叫ぶ小舟は、
な理非かゝるる、
まの影小舟りて、
道流とまねるる、
唯くしくと、
社を振くくく、

或も、
万寿を、
席中、
の余、
高、
相、

伊予の、
の、
また、
さむ

井のふり煙る水あり小雁のきて

平遊

けし湯のてもろい水あり

鹿外

玉は木の御杵此河川若く

後恋

久いもろいふく草子をとれく

芦弓

はく光りおぼく月と日とのま

鷗三

鳴れねるふあけの何も

琴志

ウ
きりぬくや獄のちりり玉曲りし

緑契

副
目しそむくちりすまた

以拍

氣ゆるせと登るくすし次小巻

寺阿

へもろくねる小はる雨

里鷗

毎解虫のさくちりき系川く

兼志

のうちかぬ美理のよきたけ

相心

嬉むてふちんぐと角をさしゆ

専雅

二ふ里の外まもほむれ

系弓

あはれをさるく月のあくと

一夏

はくはれきくぬ新字を林大く

水保

砂中味噴ふも世をなほひ
一巻

何れもあつたの折あり
巴約

客うとそ柳川さあくのし
梅思

心まねもさうして蟹の
白夜

たの神もあつたさうして茶の
茶の

宿又小徒すに心業持せし
免百

あつたさうしてと古埃り
湖月

十のさきのついで大さき
蛙全

説きよのほぐのほぐさうに
里笠

ほとまり麻地ほのあつた
校系

ほひりまじも田代夕歌よ
卓二

化とそあつた狐うらうら
却後

送りぬてきく仇のあつた
梅日

糸糸りちんとあつた
逸糸

あつたさうしてあつた
蝶糸

あつたのあつた顔目れ
圓伴

おふりーく風の月れ塵く
南

まもりのしるまねかふ頃
枕巻

囀^ニあもからぬ身のふらふら
松古

あまのくしつるけり
子友

あまのしと男まきりのたこ
太家

あまのしと男まきりのたこ
は光

あまのしと男まきりのたこ
彼慈

あまのしと男まきりのたこ
栲伍

兎のあまのしと男まきりのたこ
栲伍

幹支のえらうれたふらふら
瓢二

猿も啼く指さきよ尖る月
鶴七

あまのしと男まきりのたこ
竹音

あまのしと男まきりのたこ
六之

あまのしと男まきりのたこ
丸屋

あまのしと男まきりのたこ
太家

あまのしと男まきりのたこ
栲伍

三
云々うねるかよるる母の孝

ゆ一

洗米よむる白の志のけの

淡石

わのくくと水と雲ほのくくと

水壺

昔書の果とすく今松

和光

しらきりし是能高いめてさうり

帛書

藤汚しと破中の作

貞履

扇のぬい牛れちぬと有よと

二章

お中一日ふ通ふ横濱一船

丁明

めいしふはせやのう握系家

雀翅

へ天をぬりく記留の刻

芝草

まししてはるふあう居已凡

号丸

はるのりち事名お自へい

亀倒

まぬるるれと志るおのりやく

里家

儀ありしきを里下り

文喙

三
まうかろちるくくの天物扱

急文

しよと誇る虹のほやう

卜和

扇を舞う故の紙に綱を引纏う
名水

見よ彩ふ判り次子
葵屋

投ぐるふ葉を思奪智恵文珠
曉松

藤生へ命ふ祖の細みち
辰伍

乱と氣とあつて白蓮とそまふ
凡山

おきくに抑うねく神さ
交菱

ゆふの徳一輪の月涼く
其水

海へ雪の浪れあをえんく
里泉

鳥羽の初もなやぬ拙者も
幾青

茶の下れコキ糖うきく養息
龜卜

まうも花の日飾の女心と
憲化

市ふも凡中むくも凡中
李英

養と心陰月の石れナ過古と
栗葉

に車よまよ出と地獄令
桃枝

さくく板浮せうりく梨浮世之
河道

まももあをも命ふ場のはり
呉友

ふしむるの氣の幸ふこと

泥書

誓ふ中を流るる心

季末

ふしむるの氣の幸ふこと

季末

知枯るる地雷の跡

旅先

耳をい百の舞れ舞や

五出

響出 纏るる心と 無造作

花園

草葉や生るとるの京たより

外書

仮名平湯のふしむる

日記

雲をのりてきりりと吹く月

書本

あふまゝに怖る懐のまろ子

才石

十ウ 大形りに貫つてまゝの草の芽

俚凡

宛けつてまゝにまゝに

家名

まのありと向の頂れ遊歩

里桃

子細いまゝにまゝに

素水

おそらつてまゝにまゝに

夕雨

何れはまゝにまゝに

五出

吟堂ふる宮北町の云々 完古

自然に好ふ正凡の春 全架

右百韻

冬加美章流文略

末唐のくさきくさきくさきくさき 法士遊

くさきくさきくさきくさきくさき 六麦

くさきくさきくさきくさきくさき 顧之

法さわくくさきくさきくさきくさき 里桃

法さわくくさきくさきくさきくさき 其地

くさきくさきくさきくさきくさき 素多

くさきくさきくさきくさきくさき 桃枝

くさきくさきくさきくさきくさき 綾衣

くさきくさきくさきくさきくさき 二章

くさきくさきくさきくさきくさき 凡心

くさきくさきくさきくさきくさき 其炭

雪このうのなちはるは、
後伍

雪このうのなちはるは、
亀卜

雪このうのなちはるは、
芝草

雪このうのなちはるは、
茶葉

雪このうのなちはるは、
流水

雪このうのなちはるは、
逸象

雪このうのなちはるは、
松

雪このうのなちはるは、
夕雨

切也昇るはる日は此二又二、
政田 蜜化

末也子也尾の子也母也松也柳也、
茶号

二也兄也形也ねとつら婿も尾の妻、
十四条 完古

妻也子也尾の子也母也松也柳也、
俣光

妻也子也尾の子也母也松也柳也、
一

妻也子也尾の子也母也松也柳也、
十二条 柳忌坊

妻也子也尾の子也母也松也柳也、
凡記

妻也子也尾の子也母也松也柳也、
田上信 望友

羽衣の御や松と千代の二見形 古橋 里野

花の御や花の御 万石 吉野

中うらり此又花の御道 王 松伍

多うの御 十五茶 里野

咲は久留のけふや二見 石井 和光

文臺 長良 松司

汐下 花圃

丁 可明

香も新も侍ふ二見や梅の目、里泉

み代も新も松の目も作く 信 長友

つきい 李永

可 信 可足

咲は 信 松伍

ち 信 松伍

二 天王 松古

文 信 松古

夕代とつゝふねの二名や嘯のま、
 若水
 はまらふと家代と此橋はあやまらふた、
 柳徒
 ろくろく二名の標やまの嘯、
 一爰坊
 四つとあまのまゝやまゝの如小整机言
 めつこ之形や代とゆゑもみどり情、
 中雅
 けや今んをりもろく白く徳、
 葵庭作
 系やれまやいと夕代田花さるとに、
小西文縁
 芽おとくふ花うゝまふりく身と、
 素静坊

葉もろくふゝんゝ書梅の文書も、
葵足以松
 及び名のそ敷と筈くや嘯のまふ、
 才石
 文書のかほ、
キフ白夜
 ろくろくおち張り、
 花のむち、
 徒令
 来り清、
 永ふ日氣とあわく二足形、
 李英
 そくせふよく色あふ二足梅はくく、
西長外言
 拙筆のこゝろあふ、
か納た空
 香もろくふあふ、
 花や梅のか、
 水保

藤とあつはつふの二兄か松めあ、きあ
 其く小室のたのきふお世の主、衣慶
 藤とあつはつふの二兄か松めあ、巴約
 竹やあつはつふのたのきふお世の主、花陰
 以久すくに白ん藤の二兄こつ、枝系
 葉のたのきふの二兄のたのきふ、波蕙
 葉のたのきふのたのきふお世の主、海志
 貞のつふの二兄か松めあ、麦二

ちくはつはつふのたのきふお世の主、令契
 あつはつふのたのきふお世の主、細細
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、緑契
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、大整
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、長東
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、龜割
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、埋凡
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、古市場
 ちくはつはつふのたのきふお世の主、岩依
 文臺の徳とあつはつふのたのきふお世の主、湖月

そくつき道めたりやねのむ 谷口女 琴志

花とねしれきつる女名や天う下 中門傍 立出

しらふ西塚るたりとて草よ白ひ 北野 里巷

あふみの源たのしむい縁並、六之

むもふふふふふふふふふふふ 苗歌 危酒

糸ねと草一樹てや宿の細と、相以

井乃心縁尾のなまやふふの噴 曾井 鶴之

末廣ふたの耕とふふふ、瓢二

名もふふふ中と揚てやたの登 中門 宜伴

世の勝わつ所かくるやた此目 戸 和光

代くふふたの酒とてふく極 傍 一瓢

照り流すや目の進るふ穿くむ、古楳

多代とてふたのむ流ふ二見形、為仙

はふふたの登れ流すやぬふ川 女 柳糸

し〜く梅や朝日あふふ二見形、了史

四方に雲の布るは〜梅の月、畏雷

松と竹の梅の末は清ふ二見く 次本 瓶也

しめりあふと四ふは廣く水多の噴、百こ

草ふちひくまや自然の徳れ凡、高香

又と草一葉ひあしはの心、井首

おろく傳ふ及のふま一や松よ夜 落合 菱昔

きき直りし揚げておん庵まても、湖心

はくま増や十ふは海ふ及の心、岩虎坊

噴くくはる花さく浦の春 中津川 瓶外坊

何ゆりしとておんや二見形 太田 右衛門坊

永ふれれ彩やうはりてあこころ、卓二

伐くお増及及の葉や葉おし時、里笠

つまよ道や草くは二見の松お友 大井 雀翅

白いほきよ旭や梅れたらち 日吉 雄歩

堆しふこもたりのなきこふみ、五歩

美まよやねてや岩川の二見く 土岐 赤川

それくの新れまはの梅枝ま、谷水

此とつらぬも巖や二見うぬ 釜戸 桃李

梅とつらぬも二見や旭と暮 牛篋 竹芽

うねくつた巖と朝日やさこ所 牛篋 凡秀

雲れこり旭うねく二見うぬ、 梅顧

山とつらぬも巖と朝日や 小里 里泉

傳ふも朝日や朝日や 小里 月川

世とつらぬも巖と朝日や 小里 竹屋

名の端くつた巖と朝日や 小里 省警

噴くつた巖と朝日や 小里 溪山

噴くつた巖と朝日や 小里 新子

梅とつらぬも巖と朝日や 小里 圭二

世とつらぬも巖と朝日や 小里 梨二

世に産ふ岩とつらぬも 小里 鶴逸

梅も今産ふ巖とつらぬも 小里 桂雨

世とつらぬも巖と朝日や 小里 露草

ふも世とつらぬも巖と朝日や 小里 蝶多

昔ふあれのころにさるる茶屋
那上 俱石
 くらきよとてあふあひの華のさ
 交家
 ありてやうのほの水の流とくわ
 交家
 れとつとやあふ清くくと二見形
 潮月
 交家と志ふあふや襟のさ
 吟松
 芳出のころにさるるのさるる
 南三
 くらきよとてあふあひの華のさ
 交家
 れとつとやあふ清くくと二見形
 潮月
 交家と志ふあふや襟のさ
 吟松
 芳出のころにさるるのさるる
 南三
 くらきよとてあふあひの華のさ
 交家
 れとつとやあふ清くくと二見形
 潮月
 交家と志ふあふや襟のさ
 吟松
 芳出のころにさるるのさるる
 南三
 くらきよとてあふあひの華のさ
 交家
 れとつとやあふ清くくと二見形
 潮月
 交家と志ふあふや襟のさ
 吟松
 芳出のころにさるるのさるる
 南三

凡の御もさるるやあふあひの
 丸箱
 交家の値れさるるやあふあひの
 上風
 幾とさるるさるるやあふあひの
 自芳
 昔のころにさるるやあふあひの
 井蛙
 おのころにさるるやあふあひの
 家居
 人ほのころにさるるやあふあひの
 壺仙
 松ふあひのころにさるるやあふあひの
其 俱行
 昔のころにさるるやあふあひの
 一

とうちか松中本の二見形、景枝
 江さよつ移り一徳おむの夏、
 虎二
 月の神さめあふよおまふ産、
 ちり
 世ふまれま〜ゆ〜木の月、
 有嬰
 西の〜文臺のつらやも、
 才
 芳り〜ふされま〜まや二見形、
 佳景
 け〜くや月の影る様たろ〜、
 名義
 世の〜作多〜〜む月、
 佳景

け〜く〜備れおむ二見さ、
 巴鳴
 世所ふの末廣〜りやとふ代知、
 良羽
 みまろ〜ゆ徳や二えのまれ月、
 有念
 葉ふ〜ふまゝるふ易や松のむ、
 素泉
 世そ〜〜月のま〜れ徳産〜、
 女心
 宇世のあいの雪は〜とま〜も、
 涼兔
 作ふま〜ふたや橋板の二見形、
 益こ
 骨か〜〜ま〜も〜ふまゝるむ、
 終例

あふふあふふ 百折りやもよなも、 貞草
 草中へ咲く侍や若きれはるる風、 色分
 侍の心はまをりや高き矢の嶺に花、 一態
 花はまをりや其名もよふさう花、 二日可
 和の心はまをりや高き矢の嶺に花、 一態
 世うやまをりや高き矢の嶺に花、 一態
 其の心はまをりや高き矢の嶺に花、 一態
 文の心はまをりや高き矢の嶺に花、 一態

道の徳也世り美降とまをりむ 白鳥冠 琴羽

まをりむ 紙依 白鳥冠

まをりむ 大垣 可友

松の起むりか 李峻

二えりや 和茶

くらの嶺に実や 文細

まをりむ 系

あふふあふふ 小紙下合所

和

常くふあぐんるに二名の松と栂

肥後東比
楠云仙

余具

暮らうる月や出まきみの月輪

後亦

ちるる松ひよあゝるむき莞苾

顧之

あゝやうに塔と貝桶おてまゝく

栂司

うけあのあゝぬも 高し

栂栗

五里之月輪をうらむ旅の空

竹彦

くまのくまおとくくまのくま

御山

たうちぬの痛く切るやうに入

白折

まをりま清の端と掃うく

百之

玉みそのまをりま今めくまのゆき

亦圃

牛れまをりまうらの氷やう

畏雷

金深うあゝいさりの袋あし

李英

あひはくんとくまの試

連流

後の遠くを鳴く日の月れあゝく

風琴

常盤の心志 枝をる松 非育
百韻九略

老所の令命志とくさくさ流涙の
淨交より居てさくさの悲止うて
こまひ道徳お徳の大徳と家と事い
は雅く生涯の面目れうさの後り
馬帽子の漬よさくはくく木育の
身たさうさくはくさう者者の文

さくさ老所の懐懐さくささ
圓環はくさくもさくさ天下のたさく
家くさくさくさくさくさくさく
今さくさくさくさくさくさく
補ひさくさくさくさくさく
の道徳神と徳とさくさく
さくさくさく

さくさくさくさくさく
身さくさく

はくさく
さくさく

蕉門書林

皇都寺町通二條
檜屋治兵衛梓

天保九戌戌晚集

